

資料渉猟余話

その111

昨年暮れに泰阜村教育委員会でご教示を受けた吉澤写真館(温田本店・平岡支店)の2300枚以上のデータから、急峻な斜面に建つ神社が気にかかり、調べてみると天龍村坂部の冬祭りで見られた大森山諏訪神社「当国之一ノ宮諏訪方大明神之本地普賢尊」が最初に祀られていた地に、坂部の大杉章喜という医師によって、昭和14年頃に

再建された神社「宮之本神社(大神)」であることがわかった。この夏このコラムで紹介した(資料渉猟余話103・104)。またその後、大杉章喜が昭和22年2月、55歳で亡くなったことにより、この神社が衰退し、70年経て人々の記憶からも消えていったことが推測できた。

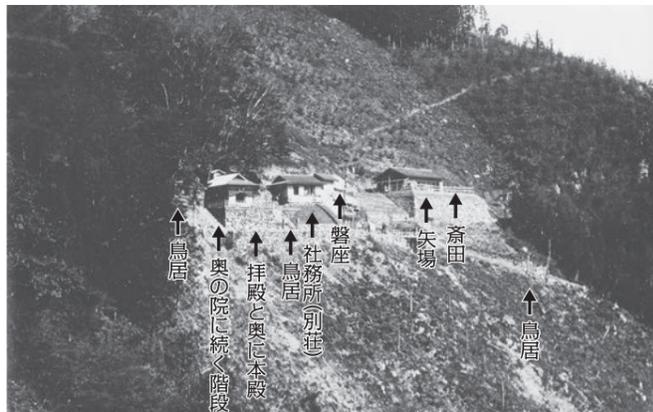
山上の神殿、その後の調査

嶋 不濁

係者は、当然その場所くらいは知っている。そこで鎌倉貞男さん(天龍村公民館長)を煩わせて、一史「ほかの文献にも掲載がない。残された写真には、向かって左から唐破風のあたる、また宮之本神社

殿のほかに1棟がある。鳥居、磐座(40人)以上が載った写真もあれば簡単に特定できる。またそんなと齋田など4棟が確認できる。しかし、これだけ壮大な結構を持つ神社であるから、民俗学者は無論、郷土史家や、祭りに関わる行政や関係者が特定できない。行ったことがあ

上も前のことで記憶が定かでない、荒れ果てているであろう山道を思うと、案内を無理じいではできない。中電関係者、山



急峻な斜面に建つ宮之本神社 昭和14年頃

岳会まで手づるを求め続ける中で、昭和48年に天龍村役場に入り、振興課で山林関係の仕事をしていた松下壽男さんが若い時分に山中で神社のものらしき石垣をみて驚いたことを思い出してくれた。もう30年以上前の記憶らしいが、彼が当時の人脈を辿りながら調査に協力してくれたことになり、彼が

(昭和57年7月)のことらしいが、昭和30年頃には石垣の上にも朽ち果てて石垣しれを続けている小林山仕事仲間が「別荘」と呼び、煮炊き宿泊できる建物があったらしい。長三郎さんが最後に見たのは40年もの前のことになり、その頃はもう柱も朽ち果てて石垣しれもなくなっていた。期待と落胆を繰り返した後の信憑性のある情報である。(つづく)



磐座 大杉章喜と家族だろうか 昭和14年頃